

藤増牧場 有限会社藤増 日本一の牛飼いの匠 藤増牧場物語



牛飼い

出雲の食卓 生産者

藤増牧場 有限会社 藤増
創業: 1976年 (昭和51年)
693-0033
出雲市知井宮町字北光寺1973-1
電話番号: 0853-23-3794

[第5回全国和牛能力共進会]
9区全国1位 内閣総理大臣賞
[第12回全国和牛能力共進会]
肉牛の部
6区全国1位 7区全国2位
8区全国2位



<https://fujimasu.jp/>



藤増牧場創業者 藤江昭雄さん

名実ともに「日本一の牛飼いの匠」として全国に藤増牧場の名を轟かせたのは、まだ記憶に新しい2022年のこと。
5年に一度開催される「和牛オリンピック」(第12回全国和牛能力共進会)で35年ぶりに藤増牧場は、全国の牛飼いたちが憧れてやまない、肉質部門の総合で日本一の栄冠に返り咲いた。
藤増牧場のゲートをくぐると立派な牛舎の棟が立ち並んでいた。フォークリフトを軽快に操り大きな牧草の包みを次から次へと運び出す20代そこそこであるう女性の姿があった。その働きぶりに思わず見とれているところに「今日の取材の方ですね」と声を掛けられた。
農大卒業後に、二十歳で藤増牧場に就農し、現在17年目を迎える三登(さんとう)さんである。持ち前の才能と努力が認められ、今では肥育の

運営管理をになう若き牧場長さんである。取材の途中で明らかにしたのですが、この方こそが、日本一の牛飼いの匠が、本気で愛情を注ぎ育てあげた藤増牧場の未来を託される若き牛飼いであった。
招き入れられた事務所の玄関を入ると、あまたの全国大会で優秀な成績をあげてこられたのであるう立派なトロフィーと賞状の山が、燦然と輝く藤増牧場の歴史に初めて触れる私たち取材陣を出迎えた。
先の第12回全国和牛能力共進会でしまね和牛の出品を記念して作られたであろう大きな記念旗を背に、年の頃、八十を過ぎるであろううか、大きなソファアに凛とした姿勢で静かに佇む創業者(現会長)の藤江昭雄さんがそこにいた。
記者「本日は、日本一の牛飼いのレジェンドにお会いできて、とても光栄です。」と挨拶した。



夢は叶えて、人の手本となり、あがれの道と成る

その様子を隣で笑顔で見つめていたのが、藤増グループの屋台骨を支える二代目(社長)の藤江信賢さんだ。大きくて恰幅のいい姿から、まるで闘牛士!まるで黒毛和牛だ!と彷彿とさせる勢いがある。目を輝かせ活気に満ち満ちていた。

牛飼いの人生を歩みだしたのは、昭和51年のこと。もともと農協のサラリーマンとして畜産業をサポートする仕事に従事。その傍らで、肥育農家さんはこれからもつと大きな経営をしたら成功するのになと、なんとなく思っていたという。そんな話を仲間や先輩にするたびに、牛飼いなんで大変なだけで、臭いし、汚いし、つまらんけん。他の商売を考えた方がいいぞ。」と何度も諭されたという。

けれど動物と過ごす時間や世話が大好きな昭雄会長の心はもう決まっていた。頭で考えた答えやこぼむ理由はどこにもなく、只なんとなく!身体の内側から湧き上がってくる想いと、わくわくする可能性に自らを奮い立たせ、牛舎を建て、黒毛和牛30頭の肥育から牛飼いの人生をスタートさせた。

2年も経つ頃には、世の中で経済動物として消費されていく食用牛たちが、どのように人様の口に運ばれ喜ばれているのか?、美味しく食されその命が全うできているのか?そんなことが気になりだした。その行動は早かった!昭和53年に、地元知井宮町に、自ら育てた和牛を精肉販売する藤増ストア第一号店を開業。消費者からの生の声を聞き出す場となり、牧場での日々の理想のお肉づくりに繋げていった。

当時は、畜産から精肉まで一貫生産で、小売販売までするという牧場や精肉店は、市内を見渡してもどこにも無かったという。まさに現代のものづくりやマーケティングに通づる発想が自然と生まれていた。
また生産者の顔が見えない農産物が、大量に生産出荷されていく時代の中で、早く生産者の顔の見える化を図り、口に入る食べ物の安心、安全を消費者に示したことは、当時としても大変価値のあることであったように感じた。

記者「時代を超えて、大変素晴らしい発想と行動力だとお見受けしますが、50年近くも前にすでに先見の明があったのですね。」と尋ねると、

会長は笑いながら「いや、そんなものはないです。なんとなくだわね!」とあっさり一蹴され。その場の空気は、吹き出る笑いで一気にほころんだ。
ただまっすぐ前を見つめ、歯に縋着せぬ口ふりと、正直で純粋な想いを伝えてくださるレジェンドの懐の温もりに、私たちの心はいついっ溶かされていった。

牛飼いを始めて11年目(昭和62)に、島根県で第5回全国和牛能力共進会が開催されることになった。
自分の牛飼いの能力と技能がどこまで世の中に通用するのかわかりたくなり初めて大会に挑んだ。当時は、生きた状態で評価する生態審査と牛を落とし枝肉にして肉質を審査する2つの審査で総合評価が行われた。

会長「忘れもしません。最初の生態審査でね、偉い大学教授が藤増牧場の牛を引合いにして、こんな大きくて、大根のような牛に育ててはいけない、これは悪い牛の見本ですよと、第1次審査会で公表されました。」

inori
kansha
goen





社長「当時の事を幼少ながら、私もすっかり覚えていますよ。確か出陣式もあり、藤増牧場に関わる全ての人が全国10位以内を祈念しながら興奮していた。確かに出品した牛は巨大だった。当然の事ながら、誰もが生体審査の結果を聞いて、ダメだろうと思っていたの覚えています。」と回想した。

会長に、牛はどのくらい大きかったのですかと尋ねた。

「枝肉で499キログラム。牛そのものの体重は800キログラム位だったと思います。当時としては、体格が立派なものでした。」

そして、第二次の枝肉審査にステージが移った。汚名を着せられながらも蓋を開いてみれば、見事なまでの霜降りの美しさと優れた肉質に、審査員たちの目は奪われた。第一次審査での酷評は大きくつつがえ



人たちがブランド牛に育てあげようと積み上げてきた努力や歴史があつて、まったく基礎が違うんですね。」

社長「裏を返して言うならば、日本一美味しいお肉がつくれても、一足飛びに、一流ブランド牛に仲間入りすることはできないんです。それは会長が言った通りです。今や全国津々浦々で、県や市も躍起になり、地域をあげてブランド化を目指していますが、成功例はあまり聞きません。たやすく物語なんて出来ないうことです。」

社長「私は、牛飼いでありませんのでね、経営者として世の中の市場から、藤増牧場やしまね和牛の行く末を見つめています。藤増で肥育したお肉が、この先たとえ何度も日本一になったとしても、「しまね和牛」のブランド名は、きっと今のままでは世の中に浸透しないと思うんです。」

記者「それは、どうしてですか？ どうしたら良くなるとお考えですか？」

社長「まずは情熱ですよ！会長を見てください。牛飼いわずか11年で

日本一になった人です。全国を見ても稀有なことで、会長は奇跡を起こしたと、私たちは今でも思っています。」

会長「まあそう言っけどね。いい牛をつくるには、なんとと言っても生産農家さんの汗水なくして始まらん。素牛（生後7〜8ヶ月の子牛）が8割で肥育が2割で決まる。しかもその素牛を生産農家さんが、どれほど手塩をかけ愛情を注ぎ込んでくれたのか、すべてだと私は思うとる。」

社長「その一方で、畜産業界も、昨今の物価高騰や就農者の高齢化などの問題を抱え、足元から危ぶまれる状況もあります。また、飽食の時代が過ぎて、消費者のお肉の味わい方、ニーズにも変化が生まれています。ブランド化のことも山々ですが、地元出雲管内での生産農家さんの高齢化が進んでいますので、共進会でいい成績を上げ続けていくことは、これまでお世話になった生産農家さんへの恩返しと、農家さんの存続のためにも藤増牧場の使命だと思っています。」



り、藤増牧場が初挑戦で出品した牛は、最高評価となる「内閣総理大臣賞」の栄誉に輝いた。日本一優秀な牛飼いの技能者として、藤江昭雄会長の名前が全国和牛能力共進会の歴史に刻まれる瞬間だった。

そして、35年の時を経て鹿児島大会で肉質部門の総合一位に返り咲き、史上はじめて日本一を2回経験する牛飼いのレジェンドとなった。

そこには、日本一の牛飼いのレジェンドとして会長を神輿（みこし）にかつぎ上げたいと願った立役者がいた。それは、ともに表彰台上に上がった愛弟子の三登牧場長である。

三登牧場長「会長、社長…、今回はひよつとすると、ひよつとするですよ！会場に集まった牛をすべて見て周りましたが、藤増ほどよく仕上がっている牛はどこにもいませんでした。この感触は間違いないと思います。」

そして、三登さんの目利きは、奇跡ではなく見事に的中した。

会長「三登は、うちに来て17年ですが、牛飼いとしての目がとてもいい。情熱もあるし才能も、すでに私を超えていますよ。そりゃねえ、一人

藤江社長



「みんなで一緒にやるやー」
この指止まれだけん。

社長「日本の肥育農家さんの技術、種雄牛づくりの技術は、すでに世界最高峰まで登り着いたのとは感じています。日本三和和牛でなくとも、サシの入ったきめ細かな霜降り、上質な脂肪や、赤身であつさりといっただけの美味しいお肉など世の中には、もう十分なほど溢れていると感じます。」

我々のような発展途上中の地域ブランド牛に比べて、松坂、神戸などの最高級黒毛和牛ともなれば、同じ黒毛和牛であっても市場価格で、2倍、3倍、4倍と高値がつくので、羨ましいほど経済合理性がいいのです。その結果、生産、肥育農家さんに好循環も生まれ、気持ちにも余裕が出るので、技術投資や生産性の向上も図りやすい。さらに次の担い手に事業を安心して継承できるというのが非常にいいことなのです。」

前の牛飼いだけじゃなく、人間として成長してもらうために、ずいぶん鍛えてきましたからね。」と…

ここで二つの疑問が浮かんだ。

日本三和和牛といえば、松坂牛、神戸牛、近江牛が有名です。また米沢牛、但馬牛なども最高級黒毛和牛のブランドの産地として全国にその名が知れています。「しまね和牛」は和牛オリンピックで、日本一美味しいお肉として2度も認められた実績があるにも関わらず、そのブランドの名は、まだまだ知られていないのはなぜでしょうか？と尋ねた。

会長「実は黒毛和牛の発祥は、島根や鳥取、兵庫の和牛が素牛（血統）と言われていますが、神戸や松坂の

つまり、牛づくりの環境がここまですべて自然と整い、いいこと尽くしに至らなければ、きっとブランド化が成功したとは言えないと思うんですね。」

記者「社長、これは容易に成せる技ではないですね…」

社長「しまね和牛を安定供給できる市場を創出できなければ、ブランド名があっても、ただ絵に描いた餅



三登統括農場長





にすぎません。きちんと流通できてこそ、はじめてブランドの名が輝くと思うんです。」

会長「まあそう言うけどね。動かんと、なにも前には進まんけんね。私は長いこと牛飼いとして幸せな人生を歩ませてもらってます。思えば、いつも牛に助けられ、周りの皆さんのご縁にも助けられました。それに、今では愛弟子の三登くんにも助けられて感謝、感謝の毎日です。言うまでもないですが…」

私の牛飼いとしてのコダワリも黙って聞き入れながら牧場を守り、いつも私を陰ながら支え続けてくれている息子には、尽くしがたい思いもありますよ。」

記者「会長さんは、たくさんのお陰様に恵まれて、日本一幸せな牛飼いの人生を歩んでこられたんですね。」

社長「ブランドもいいですが、まずはこの出雲で、みんなの気持ちを繋げないといけんーと思うのです。そのための土台は、会長がずっと背中で我々に見せてきた、「牛づくりへの情熱」と「地域の皆さまへの感謝（恩返し）」なんです。これまで共進で良い成績を上げさせてもらってます。



日本一の牛飼いの匠は、日本一牛を愛し、人を愛する人です。

最後につい鼻息も荒くなるようなお話になりました。この何とも言えない純粋で人間味あふれる人の優しさ、地域への感謝と愛は、藤増牧場を語るうえで決して欠くことのできない愛の物語であると実感した。

社長「藤増牧場はこのように、会長の動物愛にはじまり、人間愛、ふるさと愛によって、日本一の牛飼いの匠の称号をいただきながら、藤増グループとしてもたくさんさんの夢を叶えさせてもらいました。」

きっと、藤増が目の前の経済合理性だけのために、美味しいお肉をつくりを求めてきたのであれば、誰も本気で藤増ががんばれ！藤増ががんばれ！と応援してくれる人はいなかったと思います。

また、夢をみんなの夢にして一緒に叶えようやーなんてことも、ただの憧れで終わっていた。これこそ奇跡だと。会長の生き様を見続ける中で、『奇跡とは起こるものではなく、愛の力を結集すれば、必ず奇跡とは起こせるものだ。』今はその様に感じています。」

した。それは、我々の努力もありますが、よい子牛に育ててくれる生産農家さんのお陰なんです。」

会長の行動は天晴れなんです

社長「毎月、央道で子牛市場が開かれます。全国からも肥育農家さんが優秀な子牛を求めやってきます。県内の子牛以外にも、名のある産地の子牛の出品もあるので、会長、私、三登でセリに参加しています。」

まあ聞いてください。会長の行動はあっぱれなんです。」

全国から名のある子牛の出品もあるのですが…、基本的にお目当は、地元出雲管内で育てられた生産農家さんの子牛です。それをなんとすべてセリ落とすことなんです。オークションスタイルですからボタンを押しながらライバルと競うのですが、相手がなくなっても、会長は一人ボタンを押し続けています。どんどん購入金額を引き上げて高値で落札するんですね。」

記者「ひやう、会長どうしてそんなことするのですか？」



会長「まあ、牛も人間も正直な生き物だわね。牛なんて愛情を注いであげれば、注いだけ、人になつくし、見事なまでに理想の牛（美味しい肉質）にもなってくれる。そのくせ人間はちよつと面倒。わがままで、するし、欲もある。その上、いつも愛情を必要とする生き物だから、牛以上に心に寄り添ってあげないといけん。」

牛飼いをしている間に、たくさんさんのことを私は牛からいっぱい学ばせてもらいました。牛飼いは本当に楽しいですよ。それに人生を幸せで豊かにしてくれる。本当に有難いことです。」

藤増牧場、藤増グループに、今後どの様な牛飼いの挑戦のドラマが展開され、新たなストーリーが紡ぎ出されていくのか？想像するだけでわくわくしてくるのは、きっと私だけではないと感じる取材であった。

日本一の牛飼いの匠は、日本一牛を愛し、人を愛すること、すべてのご縁を生かし、日本一幸せな牛飼いになった今を生きるレジェンドだった。

会長「まあ、カッコつけらんと、いけんからね。（ニコリ）」

社長「それは、会長のエールを込めたふるさと出雲への愛なんです。高値をつけるから、文句もきちと言わせてもらっけん、頑張っている子牛を育ててよ。そして、一緒に幸せな牛飼いになろうやーというメッセージが込められているんですね。」

取材陣の誰もが、思わずはあ〜とよめいた。

ふるさと出雲への愛の大きさに触れて、私は全身に鳥肌を立て…、会長の目をじつと見つめ、恐れ入りましたと頭を下げた。



ただ可愛いだけじゃない愛情を掛ければかけただけ人になつくし理想のお肉にもなってくれる